

病 / illness

2021/06/11(fri)-21(mon)

旧加藤家住宅

〒335-0003 埼玉県蕨市南町 2-8-2

ごあいさつ

本日はゲッコーパレード本拠地企画『病』に、お越しいただき誠にありがとうございます。

これまで演劇作品を発表してきたゲッコーパレードですが今回は志向を変え、「病（やまい/illness）」というテーマのもと7組のアーティストによる7作品をお目かけます。

「病（やまい）」とは人が生きる現実です。仮に「病」を病気などで健康を害した状態、つまり何かしら不完全な状態と捉えれば、実は私たち人間はいつでも「病（やまい）」的な状態にあると言えます。心臓が正常に機能しているということは、それが止まれば死んでしまうことと表裏一体です。概念としてのカンペキな「生」や「死」ではなく、「病」という我々が生きる現実を今作『病』で追いかけてみることにしました。

私たちの日常を大きく変えてしまった現象としてのコロナ禍は、要するに「リスクの可視化」だと考えています。コロナ以前から私たちは様々なリスクを抱えながら生活してきましたが、コロナウイルスの蔓延によってリスクそのものに注目があつまり、扱いに戸惑っているのがコロナ禍だと言えないでしょうか。私たちはコロナ禍にあって、むしろコロナ禍が起きる以前の生活のリスクに気づかされました。

また、ゲッコーパレードが専門としてきた演劇は、人間が人間を演じるという性質から、殆ど全ての作品において主題は「人が生きること」そのものです。コロナ禍によって他の多くのものと同じく演劇も制限され、それを乗り越えてもなお作るに値する作品の可能性を探った時、演劇自体を手前で問い直す必要を感じています。何も演劇に限った話ではないかもしれませんが。私たちは誰もが、リスクと日常の見直しの最中にあるのだと思います。

そこで、今を生きる複数ジャンルのアーティスト7組に、このテーマをもとに作品創作を依頼しました。どのアーティストにとっても、視点をずらすようなテーマの中、自分の作品が他のジャンルの作品とオーバーラップしながら並べられるのは初めての経験だったはずです。それぞれが自分の表現を再点検し、その外側にも想いを馳せてくれました。

もしかすると、『病』は前に進むために過去を振り返るような作品になるかもしれません。ご来場いただいたあなたも当然「病」的な状態を持った一人です。作品たちに紛れ、自身を含めた『病』の個々と全体を鑑賞いただければ幸いです。

ゲッコーパレードと参加アーティストを代表して
黒田瑞仁

不在の証明 / 石原葉

私はこれまでの作品において、モチーフを隠したり、削ったり、溶かしたりする手法を多くとってきた。それは、私たちが誰かと対面した時、相手に偏見や色眼鏡といったフィルターをかけざるをえないことを示すだけでなく、相手像を変容させつつも手探りで相手の輪郭を捉えようとする「対話」という営みに興味があるからだ。今回の制作において殆どの打ち合わせがオンラインで行われたが、画面越しの相手の奥行きは想像することしかできない。しかし、そもそも相手に思いを馳せるその行為は何も変わりなく私たちの営みに息づいている。

俺は胡桃の殻の中に閉じ込められても自分を無限の空間の王とさえ思えるのだ / 黒田瑞仁 + 市松 出演：市松

舞台や劇場を境界の人間は「小屋」とか「ハコ」という、いささか身も蓋もない呼び方をしがります。その中で、演出家は自らは演じず、作らず、ただ指揮をとる。しばしば世界の全てがこの小さな劇場の中で起こっているような錯覚も覚えます。演出家に肉体は不要ではないかと思うことさえありました。しかし昨今の状況と「病」の中にあっては、再考を迫られています。

演出家二名による作品。タイトルはシェイクスピア『ハムレット』二幕二場より。パフォーマンスはソポクレス『オイディプス王』を下敷きに組み立て。

なんだっけ / 砂と水玉 出演：根本和歌葉

思い出したり、予感がしたり、既視感を覚えたり。

砂と水玉は、具体的なエピソードを記述するよりも、質感にこだわり、連想を観客から引き出す事に重きを置いています。そのためにダンスとその技術が必要であり、結果としてダンスパフォーマンスと呼べる形での作品発表を行ってきました。今回もテーマ「病」を受け、ダンスからなるパフォーマンスを行います。

そこに『居る』ために 出演：宮本悠加

ダンサーの宮本悠加と演出家の三浦雨林が「そもそも、その場に人間が居るってどういうこと？」という大前提から舞台芸術を考えるプロジェクト。舞台上での“立ち方”ではなく“居方”を考える、創作や上演等の終着地点を持たないプロジェクトとして活動している。本企画に際しても作品は作らず、パフォーマンスもしていない。

「病」が好き

ゲッコーパレードの黒田瑞仁から「病」について書いてほしいといわれて、思い出したのはゲッコーパレードが2018年に上演した『ガラスの動物園』だ。社会と折り合えない女性の病を描くテネシー・ウリアムズの戯曲が細切れにされていて、演者は高速で役柄を交代しながら同じシーンを反復する。後半になって劇がひとつのラインに収まり始めても、セリフの抑揚は抑えられ、能面のごとき無表情は変わらない。病は、感情表現や話の筋から乖離している。上演中、なつかしさを感じていた。社会的に認められたルールや空気から乖離しているものが、私に馴染み深い「病」だったから。

生まれた時に人は健康そのもので、年を重ねるにつれて病が増えていく、というのが一般的な考え方らしい。私の場合、幼少期が「病」だった。体も感情も自由が利かず、他人との間では軋みばかりで憂鬱だった。人と共有できない気分が続いた。今や、憂鬱も苦しみも感じない。経験と工夫の結果か、とにかく世界との程良い関わり方がわかるようになって、自分で自分を信頼している。「健康」という言葉は少し違う気がするけど、「自分、最高だな〜」と思いながら生きてます。ヤッタネ！

実をいえば、「病」という言葉は嫌いじゃない。「健康」より遙かに響きがいい。「や」も「ま」も「い」も柔らかくて好きだ。あと、「健康」は「病」の対義語ではない。「病」は誰でも共有できないその人固有の痛みのようなもので、「健康」であっても常にそれはある。自分の場合も「病」がなくなったというより、「病」との付き合い方を知ったという方が近い。

「病んだ社会」なんて言い方もあるけど、社会が病んでいると私は安心する。みんながそれぞれの痛みを意識しているんだなと思って、穏やかな気持ちになる。不正や差別には憤りを感じるけれど、それはそれとして、社会にはちゃんと病んでいてほしい。「病」を、「是正すべき問題」のメタファーとして用いるのは違う気がする。

The Smithsというバンドに「Still Ill」という曲がある。全然明るい曲ではないけれど、「僕はまだ病気？ (Am I still ill?)」と伸びやかに歌われる時に高揚感があって好きだ。メランコリックなメロディの上で、「まだ病気だといいなあ」と歌っているように聞こえる。病を持つ経験は嬉しいと思う。それがあると、生きるのが楽しいです。ヤッタネ！

伏見瞬 / 批評家、ライター

批評 × 旅行誌『LOCUST』編集長。

『ユリイカ』『現代ビジネス』などのメディアに寄稿。2021年秋に初の単著を刊行予定。

人の集まりが生み出すものについて

アート界隈で「コレクティブ」という言葉を良く耳にするようになって久しい。2018年の美術手帳4・5月合併号『アートコレクティブが時代を拓く』では、まだ耳慣れない言葉として、しかし既存の制度への違和感から自ら道を切り開こうとする集団として特集が組まれた。アーティスト達が集団を作り制度に抗うことは、印象派等を挙げるまでもなく、美術史が編まれるようになった時代から常に繰り返されてきたことであり特筆すべきことではない。しかし、批評家の上妻世海が「制作の共同体」で述べるように、現代の若いアーティストたちは従来の制度的芸術に憧れることなく、独自の路線で一自らのアートのスペースを持ち、SNSで発信をし、展覧会の企画を行うことで独自の文脈を作り上げつつある。

これらを踏まえて、ゲッコーパレードに視点を移そう。彼らは5年目にして会計の専門家や、パフォーマー、舞台制作、アイデンティティ未定…と多様な肩書きを持った人々を加入させただけでなく、拠点である蕨から遠く離れた土地在住者も歓迎した。先述したコレクティブの戦略からすれば、あまり効率的とはいえない人選だが、新体制にあたって行われた会議における演出家・黒田瑞仁の「演劇は文化的行為である」という言葉に理解のヒントがありそうだ。

「文化」とは、共同体の中で共有される考え方や価値基準の体系のことである。そもそもこの世の中にある全ての作品は文化的行為の中で理解されるが、その中でも演劇は複合芸術と呼ばれるように、戯曲や音楽、舞台美術や衣装、役者の発話や身振りといった様々な文脈の表現を集約し、作られる。しかし、私たちが難なく作品を受容出来るのは、普段生活している中で、無自覚に文化を享受し自らに情報を溜め込んでいるからに他ならない。先述した従来の制度的芸術もまた、文化の主流的な行為であったが、インターネットやグローバル化によって文化が細分化されることで効力を失いつつある。その中でゲッコーパレードは制度的芸術におもねるのではなく、常に文化が醸成され変化する共同体をアップデートし続けるために、多種多様のメンバーを入れたのではないだろうか。

また今回の『病』の形式も多種多様の視点から「生」を捉えようとする試みである。世界中を席卷するコロナ感染症により私たちは共通した苦難に直面していると感じているが、実際の感染症による生活様式の変化は、良くも悪くも個々人の環境に依拠した。その中で同世代の様々な表現者たちが「演劇」という形に集約されるわけではなく、各々の表現をもって「病」というテーマに挑むこと。それは、個々の作品の差異や共通点によってゆるやかに繋がっていることで、いやむしろ、バラバラな人々が一つの空間を占有しあっているということそのものが、今私たちの生きるこの日々を一時的に目の前に立ち上げようとする行為を成り立たせている。

「目的ではなく人の集まりこそがパレードのように活動や表現を形成していく」当日パンフレットに必ず記載されるこの信条は、メンバーや作品に関わる人々だけでなく、観賞者のあなたも含まれる。今この集まりで何が生まれようとしているのか、しかと確かめていただきたい。

痕 / 本間志穂 奏者：高橋多美子

わたしはこれまで西洋音楽とされる作品を演奏するなかで、大きな隔たりを感じてきた。時代も場所もまったく異なるものと向き合う中で唯一確かなものとしてつよく感じる事ができたのは自身の肉体がその場に”ある”ことでした。楽器と奏者はそれぞれに他者の他者である。けっして楽器を奏する者が語るための道具ではないと考えています。その場でたち現れ消えゆく”音”は他者との接点の確かなものとしての現れです。そして他者の他者になるための最初の姿勢として“きくこと”に注意してきました。“きくこと”とは生きてゆくなかでの他者との絶え間のない調律であり、生きることは他者とのあいだで調律しながらたえず呼吸してゆくことである。

夢の立札 偽の文 / 矢田真麻

日記に代表されるように、生≡経験の後に文は書かれる。これが通常の流れであるとするならば、書き手は生に先回りして文が出現し、体はただ追ってゆく状態に憧れる。

夜、立札や回覧板や、宙に浮かぶト書きを夢に見る。夢の状況に丸裸で振り回されることへの抵抗。いつ何時「書くこと」が降ってくるか分からない緊張を、解きたいという願望。

『病』において、本来、実体のない文字がパフォーマンスとの隣接に耐えるには、目覚めれば消えるこの夢の書法を再び見出す以外、ないと思った。

Theatrical Capsule Collection “Growing Holic” /
YUMIKA MORI 出演：永山香月

今回は衣装ではなくてファッションとして洋服を作りました。ファッションショーではモデルさんに着用を願いますが、今回は役者さんに着て出演いただきます。

今まで演劇とファッションとを行き来してきた経験から、このような形式にたどり着いたというのが正直なところです。

私は服について考える時は、人間について考えている事が多く、今回は更に自分の持つ身体や思想、気分などさらに探った形となりました。

引用

アントナン・アルトー 粟津則雄訳 『ヴァン・ゴッホ』筑摩書房、1997、34p

ロラン・バルト 山田登世子編訳 「7 言語と衣服」『ロラン・バルト モード論集』筑摩書房、2011、82.84-85p

ポール・ヴァレリー 佐藤正彰訳 「我がファウスト」『筑摩世界文学大系 56 クローデル／ヴァレリー』筑摩書房、1976、437p

エミール・ゾラ 川口篤・古賀照一訳 「ナナ」『ゾラ 新潮世界文学 21』新潮社 1970、784p

今後の予定

石原葉 イラスト制作

TOKYO REAL UNDERGROUND

オンライン年表『舞台出来事ロジー』

2021年4月1日(木)~8月15日(日)

<http://www.tokyorealunderground.net/program/dekigotology.html>

五藤真 会計

MATSUDO "QOL" AWARD 2021

会場: PARADISE AIR

2021年7月6日(火)~2022年3月29日(火)

<https://www.paradiseair.info/news/2021/05/30/17196/>

根本和歌菜 出演(オンライン配信)

TOKYO REAL UNDERGROUND

「舞踏ある視点」シリーズ

伊藤キム+東京令和アングラダンサーズ『この世は儚い地下の楽園』

2021年6月12日(土) 19:30~配信開始

(8月15日まで視聴可能)

<http://www.tokyorealunderground.net/>

矢田真麻 出版

冊子『イリュミナシオン』掲載

ピエール・ドリュ・ラ・ロシエル「ディルク・ラスプの回想」に纏わる創作「音読者」

2021年6月刊行予定

<https://motion-gallery.net/projects/illuminations77>

黒田瑞仁 講座

アートインストレーター育成プログラム

「物語を場所に宿す」

会場: 文翔館(山形市旅籠町)ほか

主催: 東北芸術工科大学

2021年7月3日(土)~10月9日(土)

ゲッコーパーレードは「目的ではなく人の集まりこそがパレードのように活動や表現を形成していく」という信条から名付けられました。その私たちのもとにたくさんの方が集まってくださり、『病』という形のパレードができあがりました。パレードに参加してくれた方、サポートしてくれた方、そして、観客であるあなたに。この場を借りて御礼申し上げます。

【プチ・パトロンチケット収益利用報告】

プチ・パトロンチケット収益を、以下の用途に利用させて頂きました。

○2016年5月31日	音響機材(アナログミキサー)購入費として	11,664円
○2016年8月24日	照明協力スタッフ人件費(一部)として	20,000円
○2016年12月21日	オルガン運搬費として	21,698円
○2017年9月28日	照明借用費として	56,492円
○2018年2月26日	照明機材購入費として	84,432円
○2018年9月18日	音響スピーカー購入費として	19,224円
○2019年8月17日	客席用クッション購入費として	9,990円

観劇の際に皆様からお支払いいただくチケット代金は、作品を創造・上演するための会場費・人件費・舞台費・文芸費・製作費として充てさせて頂いております。皆様の観客としての参加が芸術活動を支えています。この場を借りて御礼申し上げます。

石原葉、市松、岡田萌、河島琴音、河原舞、岸本昌也、黒田瑞仁、古賀彰吾、五藤真、崎田ゆかり、柴田彩芳、鈴木麻友、砂と水玉、瀬尾憲司、そこに『居る』ために、高橋多美子、出崎洋樹、永山香月、根本和歌菜、林純平、伏見瞬、本間志穂、三浦雨林、宮本悠加、本橋仁、矢田真麻、YUMIKA MORI、観客のみなさま

Web: <https://geckoparade.com/>
E-mail: geckoparade@gmail.com

〒335-0003 埼玉県蕨市南町2-8-2 田加藤家住宅
全体構成: 黒田瑞仁
照明協力: 鈴木麻友
チラシデザイン: 岸本昌也
チラシ写真: 瀬尾憲司

主催・企画・制作: ゲッコーパーレード
後援: 蕨市